

# 令和5年度学校自己評価システムシート(県立越谷北高等学校)

目指す学校像 高い理想と豊かな人間性を兼ね備えたグローバルリーダーを育成する。

重点目標 1 すべての教育活動における「主体的・対話的で深い学び」によって、一人一人の生徒の主体性を伸長する。  
 2 理数教育やSSHの取組の充実と「リベラルアーツ」教育の実現によって、グローバル人材としての資質を高める。  
 3 地域と連携し、高い進路目標を掲げ、自己実現を目指す学校の情報を発信し、学校の評価を高める。

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。  
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

A	ほぼ達成(8割以上)
B	概ね達成(6割以上)
C	変化の兆し(4割以上)
D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日は、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	10名
	生徒	5名
	事務局長(教職員)	8名

年度		学 校 自 己 評 価		年度評価(1月29日現在)					
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策		
1	【現状】 ○「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善は進んでいる。 ○ICTを活用した授業を実施する教員は増加している。 ○生徒の「主体性」を伸長する必要性を保護者とともに共有している。 ○組織的な生徒指導体制は整っている。 【課題】 ①1人1台端末環境に対応したBYODの定着と活用方法の共有 ②「深い学び」に向けた指導の工夫・改善 ③進路希望の顕在とともに、視野の拡大や教科横断型の知識の習得へ意識を変化させた授業改善 ④部活動の勉強との両立に向けた計画、指導の工夫及び保護者との共通理解 ⑤生徒の「主体性」を伸長する指導の組織的な取組 ⑥生徒の個別状況に応じた対応の工夫	①ICTの効果的な活用 a ICTの効果的な活用とデータの共有化の推進 b デジタルとアナログの良さを生かした「ハイブリッド型授業」の実践 c 1人1台端末環境に対応したBYODの活用方法の共有 ②「深い学び」の検証と研究 a 「リベラルアーツ」教育を組織した授業の実践 b 主体的に学ぶ意識の啓発 c 「深い学び」へ導く指導の工夫・改善 ③部活動や学校行事の充実 a 部活動における顧問と生徒との目標や計画の共有化 b 部活動と学習活動の両立 c 生徒主体の学校行事等の実施 ④「主体性」を高めるための意識啓発及び取組の工夫・改善 a 「スクール・ポリシー」を組織した教育の実践 c 生徒の個別状況に応じた面談や組織的な教育相談体制の充実	a タブレット、プロジェクター等、ICTを活用する授業の工夫に取り組みできた。 イ ICTを活用する授業、教材等のデータの共有は増加したか。 ウ 1人1台端末導入の環境や体制が整ったか、また活用方法を共有できたか。 ア 生徒の授業への期待が、試験知識偏重から「リベラルアーツ」の必要性を認識した視野の拡大や教科横断型の知識の習得へ変化したか。 イ 主体的に深く掘り下げて学んだ経験をした生徒は増加したか。 ウ 生徒の「主体的に学び続ける力」を高めるための意識啓発に取り組み教員は増加したか。 エ 「深い学び」を意識した指導は実践されたか。 ア 顧問と生徒、保護者で部活動目標や計画について共通理解し、信頼関係はできているか。 イ 部活動と学習活動を両立できていると感じている生徒・保護者の割合は8割を超えたか。 ウ 生徒アンケートで学校行事に関する評価(肯定的評価:4段階評価で3.0以上)は向上したか。 エ 生徒主体で実施された学校行事等は増加したか。	①全校を挙げて取り組み、ほぼ達成できた。 ア: ICTを活用した授業の工夫に取り組んだ教員83.7%、BYODを活用した授業を実施した教員67.4%【教員アンケートより】 イ: ICTを活用したデータの共有をした教員65.1%【教】 ウ: 授業等でiPadが効果的と感じた1年生96.3%【生徒アンケートより】またICT活用プロジェクトチーム会議を定期的に開催。さらに教員対象研修会を3回実施。 ②全校を挙げて取り組み、ほぼ達成できた。 ア: 視野の拡大や教科横断型の知識を意図した授業に取り組んだ教員88.4%【教】、それに期待する生徒89.9%【20Pの父兄満足度【生】】 イ: 主体的に深く掘り下げて学ぶ経験をした生徒85.7%は7P増加【主】 ウ: 意識啓発に取り組んだ教員97.7%と2P増加【教】 エ: 深い学びを意識した工夫改善に取り組んだ教員90.7%【教】 ③おおむね達成できた。 ア: 目標計画について共通理解をしている生徒79.5%【主】保護者68.7%【保護者アンケートより】 イ: 部活動に対して肯定的な割合92.7%【主】83.9%【保】 ウ: 学校行事に肯定的な割合76.9%、評価3.07【主】93.4%、評価3.38【保】 エ: 体育祭、文化祭とともに生徒主体の実行委員会が主体的に動くことができた。2学年の修学旅行、生徒主体での交流会が中心となつた活動であった。 ④生徒の主体的な動きがみられ、ほぼ達成できた。 ア: 生徒の主体性を高めるために工夫を凝らした教員93.0%は6P増加【教】 イ: 自律の姿勢を促した教員86.0%【教】、生徒による交通安全伝達講習も実施した。 ウ: スクールポリシーは共有し、学校HPに掲載した。 エ: スクールカウンセラーを活用した組織的な教育相談体制を整え、不登校、心の悩み等の対応に当たっている。相談件数延べ97件(1月未現在)	A A A B A	○授業の見直し・課題解決力をさらに伸ばすための授業、SSH事業等の模索 ○国際理解教育を柱に据えたグローバル人材の育成。そのため海外派遣等、各種事業の取組 ○北高探究の日を目標に掲げた探究活動の指導計画及び実践の定着 ○、主体的に活動する生徒の育成 ○観点別評価の点検及び改善			
							②SSH事業の全校体制での取組の構築及び拡充 b クロスカリキュラムの全校体制での取組の拡充 c 第1期課題の確認と解決に向けた対応	ア SSH事業の生徒・保護者アンケートにおける評価(肯定的評価:4段階評価で3.0以上)は向上したか。 イ 全校体制で取り組むSSH行事は適切に実施できたか。 ウ クロスカリキュラムのシラバスと指導案の作成、授業実践は増加したか。 エ クロスカリキュラムを全校で取り組むために組織を再編できたか。 オ 全校生徒がクロスカリキュラムがSSHの研究開発であることを意識して取り組んだか。 カ 第1期の課題の確認と課題解決に向けた取組が進んだか。	①全校を挙げて体制が整いほぼ達成できた。 ア: 適切な情報提供を共有した生徒70.7%と9P増加【主】保護者81.0%【保】 イ: 生徒研究発表会(6月)、中間発表会(12月)は予定通り実施。質疑応答も活発であった。その他の行事も成果を上げた。 ウ: 各学年でクロスカリキュラムに取り組み、指導案を作成した教員67.4%【教】 エ: SSH推進委員会が中心となり取り組んだ。研修会も実施した。 オ: そのように意識している生徒54.0%と昨年度より6%増加。 カ: 第1期に入り、クロスカリキュラムがSSHの研究開発であることを意識している教員54.0%と昨年より4%増加【教】また、オの結果より生徒の認識も高まっている。
							②グローバル人材育成のための国際交流事業の充実 a カナダ派遣等の海外研修の推進 b グローバル人材育成のための事業等への参加意欲の啓発 c 探究活動とのコラボによるプレゼンテーション能力の育成	ア カナダ派遣等の海外研修は適切に実施されたか。 イ エンパワメントプログラムの他プログラムへの参加生徒は増加したか。 ウ プレゼンテーションや効果的なスライド作成などプレゼンテーション力は向上したか。	①各行事が順調に実施でき、ほぼ達成できた。 ア: 計画通り実施し、3名参加した。現地の大学で気候変動や環境について学ぶことができた。十分な成果があった。 イ: エンパワメントプログラムの参加は少なく、3月にシンガポール大使館訪問予定。 ウ: SSH生徒研究発表会で英語によるプレゼンテーションを行った。台湾高校生との交流授業、インド高校生とのオンライン学習でも英語でスピーチを行ったりと活発に実施でき、能力の向上が見られた。
							③探究学習を通じての課題解決力・課題解決力の育成 a 「理数探究基礎」と「総合的な探究の時間」の計画的な実施 b 理数科の理数課題研究の充実	ア 「理数探究基礎」と「総合的な探究の時間」は計画に従って組織的に実施・指導できたか。 イ 課題発見力・課題解決力は向上したか。 ウ 理数課題研究の内実は充実したか。	③探究学習部が主導し、組織的に共通理解が図られ、ほぼ達成できた。 ア: 実施計画どおり中間発表、最終発表を実施した。2学年の北高探究発表会1/27(土)に公開された。中学生・保護者の参加が71名 イ: 課題発見力・解決力を意識した授業を実施した教員83.7%【教】SSHの取組で課題発見力・解決力の向上を期待する生徒76.0%と10P増加【主】 ウ: 6月の発表は指導担当者からも好評であった。代表が8月の全国大会で発表した。新学習指導要領2年目に入り、各教科で点検が進みほぼ達成できた。 ア: 観点別評価の指標に沿いながら着実に査問作成においても取り組んでいる。 イ: 各学年で共通理解を持ち、適切に評価できている。
2	【現状】 ○SSH事業は第1期に入り、学校全体の取組として浸透しつつある。 ○国際交流事業はコロナ禍でも積極的に新規事業や代替事業、オンラインの活用等に取り組んできた。 ○探究活動が定着し、実践やプレゼンテーション等の機会を設定している。 【課題】 ①SSH事業の第1期から全校体制での取組強化 ②国際交流事業の取組の継続と拡充 ③「理数探究基礎」と「総合的な探究の時間」の計画的な実施と発表の充実 ④観点別評価等学習評価方法の点検	①SSH事業の全校体制での取組の構築及び拡充 b クロスカリキュラムの全校体制での取組の拡充 c 第1期課題の確認と解決に向けた対応	ア SSH事業の生徒・保護者アンケートにおける評価(肯定的評価:4段階評価で3.0以上)は向上したか。 イ 全校体制で取り組むSSH行事は適切に実施できたか。 ウ クロスカリキュラムのシラバスと指導案の作成、授業実践は増加したか。 エ クロスカリキュラムを全校で取り組むために組織を再編できたか。 オ 全校生徒がクロスカリキュラムがSSHの研究開発であることを意識して取り組んだか。 カ 第1期の課題の確認と課題解決に向けた取組が進んだか。	①全校を挙げて体制が整いほぼ達成できた。 ア: 適切な情報提供を共有した生徒70.7%と9P増加【主】保護者81.0%【保】 イ: 生徒研究発表会(6月)、中間発表会(12月)は予定通り実施。質疑応答も活発であった。その他の行事も成果を上げた。 ウ: 各学年でクロスカリキュラムに取り組み、指導案を作成した教員67.4%【教】 エ: SSH推進委員会が中心となり取り組んだ。研修会も実施した。 オ: そのように意識している生徒54.0%と昨年度より6%増加。 カ: 第1期に入り、クロスカリキュラムがSSHの研究開発であることを意識している教員54.0%と昨年より4%増加【教】また、オの結果より生徒の認識も高まっている。	A A A	○課題発見力・課題解決力をさらに伸ばすための授業、SSH事業等の模索 ○国際理解教育を柱に据えたグローバル人材の育成。そのため海外派遣等、各種事業の取組 ○北高探究の日を目標に掲げた探究活動の指導計画及び実践の定着 ○、主体的に活動する生徒の育成 ○観点別評価の点検及び改善			
							②グローバル人材育成のための国際交流事業の充実 a カナダ派遣等の海外研修の推進 b グローバル人材育成のための事業等への参加意欲の啓発 c 探究活動とのコラボによるプレゼンテーション能力の育成	ア カナダ派遣等の海外研修は適切に実施されたか。 イ エンパワメントプログラムの他プログラムへの参加生徒は増加したか。 ウ プレゼンテーションや効果的なスライド作成などプレゼンテーション力は向上したか。	①各行事が順調に実施でき、ほぼ達成できた。 ア: 計画通り実施し、3名参加した。現地の大学で気候変動や環境について学ぶことができた。十分な成果があった。 イ: エンパワメントプログラムの参加は少なく、3月にシンガポール大使館訪問予定。 ウ: SSH生徒研究発表会で英語によるプレゼンテーションを行った。台湾高校生との交流授業、インド高校生とのオンライン学習でも英語でスピーチを行ったりと活発に実施でき、能力の向上が見られた。
							③探究学習を通じての課題解決力・課題解決力の育成 a 「理数探究基礎」と「総合的な探究の時間」の計画的な実施 b 理数科の理数課題研究の充実	ア 「理数探究基礎」と「総合的な探究の時間」は計画に従って組織的に実施・指導できたか。 イ 課題発見力・課題解決力は向上したか。 ウ 理数課題研究の内実は充実したか。	③探究学習部が主導し、組織的に共通理解が図られ、ほぼ達成できた。 ア: 実施計画どおり中間発表、最終発表を実施した。2学年の北高探究発表会1/27(土)に公開された。中学生・保護者の参加が71名 イ: 課題発見力・解決力を意識した授業を実施した教員83.7%【教】SSHの取組で課題発見力・解決力の向上を期待する生徒76.0%と10P増加【主】 ウ: 6月の発表は指導担当者からも好評であった。代表が8月の全国大会で発表した。新学習指導要領2年目に入り、各教科で点検が進みほぼ達成できた。 ア: 観点別評価の指標に沿いながら着実に査問作成においても取り組んでいる。 イ: 各学年で共通理解を持ち、適切に評価できている。
3	【現状】 ○50%程度の生徒が国立大学進学を希望し、高い進路希望を実現させる。 ○ICTを併用した情報発信が行われている。 【課題】 ①キャリア教育を充実させる指導と高い進路希望を実現させる指導の両立 ②大学入共通テストに対応した指導の工夫改善 ③ICT等を活用した適時・適切な情報発信 ④働き方改革をふまえて、重点化した小中学校や地域との交流の実施	①キャリア教育の充実 a 3年間を通した計画的なキャリア教育の実践 b 高い進路希望を持ち続け、その実現につながる指導の充実	ア 3年間を通したキャリア教育、進路指導はできたか。 イ 高い進路希望を持たせる指導の工夫改善はできたか。 ウ 受験対策指導、生徒個別指導や保護者面談は適時・適切に実施できたか。 エ 大学入学共通テストに対応した指導の工夫改善はできたか。 オ 大学入学共通テスト5教科以上受験者の割合は増加したか。	①高い希望を維持・実現させるための進路指導と受験対策だけでなく、生涯にわたるキャリア教育の実践 ○HPの充実及び地域への適切な情報提供 ○交流活動を通じた地域社会への貢献。特にこれまでの成果を活かした特別支援学校との交流活動の充実					
					②ICT等を活用した適時・適切な情報発信 a ICTを活用した情報発信の充実 b 生徒募集対策の実施内容・方法の工夫・改善	ア 本校の魅力や生徒の活動をICTを活用して適切に情報発信できたか。 イ 生徒・保護者の情報発信に関する肯定的評価は増加したか。 ウ HP閲覧数は増加したか。 エ 中学生の生徒に対する評価は高まり、本校志望者数は増加したか。	①高い希望を維持・実現させるための進路指導と受験対策だけでなく、生涯にわたるキャリア教育の実践 ○HPの充実及び地域への適切な情報提供 ○交流活動を通じた地域社会への貢献。特にこれまでの成果を活かした特別支援学校との交流活動の充実		
					③地域や小中学校との交流の改善 a 交流イベントへの参加や実施 b 小中学校との交流事業の実施(オンライン実施も含む)	ア 部活動や生徒会による地域や小中学校、特別支援学校との交流は適切に実施できたか。ICTを有効活用できたか。 イ 部活動等での小中学校との交流を実施できたか。それによって生徒は成長したか。	①計画的に進め、ほぼ達成できた。 ア: 受験対策だけでなく高い進路指導を取り組んだ教員81.4%【教】 イ: 高い進路希望を実現した指導に取り組んだ教員93.0%【教】 ウ: 保護者面談は計画的に実施。春前、長期休業中も個別対応を適宜実施。 エ: 大学入試改革に対応した指導に取り組んだ教員81.4% オ: 5教科受験183名(昨年度168名) ②全校を挙げて計画的に進め、おおむね達成できた。 ア: 各担当はほぼ毎日更新。インスタグラムも始め、情報発信活動できている。 イ: 肯定的回答は生徒77.9%【主】、保護者93.2%【保】とわずかながら向上。 ウ: HP閲覧数は1日平均2821件(昨年度2960件) エ: 12/15現在、普通科1.25倍(昨年度1.26倍)、理数科1.28倍(昨年度1.50倍)		
④働き方改革をふまえて、重点化した小中学校や地域との交流の実施 a 交流イベントへの参加や実施 b 小中学校との交流事業の実施(オンライン実施も含む)	ア 部活動や生徒会による地域や小中学校、特別支援学校との交流は適切に実施できたか。ICTを有効活用できたか。 イ 部活動等での小中学校との交流を実施できたか。それによって生徒は成長したか。	①計画的に進め、ほぼ達成できた。 ア: 部活動単位での近隣小中学校との交流、生徒会主催の冬の交流(参加者38名)が計画どおり実施できた。参加した生徒の満足度は高く、相手校からも好評であった。 イ: 学校説明会等で各活動見学会を実施した。							

学校関係者評価	
実施日	令和6年2月22日
学校関係者からの意見・要望・評価等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度からiPadを活用したというところで、教職員の対応が難しいところもあったかと思う。生徒の理解向上と先生方の負担軽減につながる活用がされたい。また、iPadをノートへの代わりにできると利便性が高く感じられたのでの授業でも使えるようになると良い。</li> <li>・ICTの活用や評価に関する研究が今後の課題になると思う。</li> <li>・スクールカウンセラーへの相談97件については、解決に向けて積極的に取り組んでいただけだと感じる。保護者と生徒の回答に若干違いがあるようだが、学校側からもっと情報発信しても良い。</li> </ul>